全巻構成

◎**第一巻**　ISBN978-4-305-70041-4　本体8,500円（税別）・既刊
『十巻本伊勢物語注　冷泉家流』（鉄心斎文庫蔵）
『増纂伊勢物語注　冷泉家流』（鉄心斎文庫蔵）
『伊勢物語奥秘書』（鉄心斎文庫蔵）

◎**第二巻**　ISBN978-4-305-70042-1　本体8,500円（税別）・既刊
『和歌知顕集　書陵部本系統』（歓喜光寺蔵）
『伊勢物語和歌知顕集　島原松平文庫本系統』（鉄心斎文庫蔵）
『伊勢物語難儀注』（冷泉家時雨亭文庫蔵）
『伊勢物語髄脳』（鉄心斎文庫蔵）

◎**第三巻**　ISBN978-4-305-70043-8　本体9,800円（税別）・既刊
『伊勢物語愚見抄（下巻は兼良自筆本）』（冷泉家時雨亭文庫蔵）
『伊勢物語肖聞抄　文明九年本・宗長注書入』（片桐洋一蔵）
『伊勢物語肖聞抄　延徳三年本』（聖護院蔵）
『伊勢物語山口記』（鉄心斎文庫蔵）

◎**第四巻**　ISBN978-4-305-70044-5　本体14,800円（税別）・既刊
『伊勢物語惟清抄』（天理大学附属天理図書館蔵）
『伊抄　称名院注釈』（三条西家旧蔵　学習院大学日本語日本文学科研究室蔵）
『伊勢物語宗印談』（鉄心斎文庫蔵）

◎**第五巻**　ISBN978-4-305-70045-2　本体14,800円（税別）・既刊
『志能夫数理』（陽明文庫蔵）
『経厚講伊勢物語聞書』（曼殊院蔵）
『伊勢物語闕疑抄　寛永十九年刊本』（鉄心斎文庫蔵）

◎**第六巻**　ISBN978-4-305-70046-9
『伊勢物語愚案抄』（東山御文庫蔵）
『伊勢物語後水尾院抄』（京都大学附属図書館蔵）

◎**第七巻**　ISBN978-4-305-70047-6
『初度本伊勢物語拾穂抄』（鉄心斎文庫蔵）
『伊勢物語拾穂抄　延宝四年刊本』（片桐洋一蔵）

◎**別巻**　ISBN978-4-305-70048-3
索引（人名・書名・引用和歌）

片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

山本淳子（やまもと・じゅんこ）
1960年生まれ。京都大学大学院博士後期課程修了。京都学園大学教授。主要著書『紫式部集論』（和泉書院）『源氏物語の時代　一条天皇と后たちのものがたり』（朝日選書）『ビギナーズ・クラシックス　日本の古典　紫式部日記』（角川ソフィア文庫）

岸本理恵（きしもと・りえ）
2002年、関西大学大学院博士課程後期課程単位取得。関西大学・羽衣国際大学非常勤講師。主要論文「定家監督書写の和泉式部集」（『国語国文』第76巻7号）主要著書『元良親王集全注釈』（共著・新典社）

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第五巻

2010年（平成22）2月26日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社**笠間書院**
〒101 0064　東京都千代田区猿楽町2 2-3
☎ 03-3295 1331(代)　FAX03 3294-0996
振替00110-1-56002

NDC分類 913.32

ISBN978 4 305-70045 2 C3395
藤原印刷・渡辺製本
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。
（本文用紙：中性紙使用）
http://kasamashoin.jp

経厚講伊勢物語聞書

（曼殊院蔵）

山本登朗

わすれん

第五ノ句、我モワスレハツマシキト云心ヲイヘル也。となむ。人のくにゝても、猶かゝる事なむやまさりける。人の国トハ、他国(ヒトノクニ)也。

十一

昔、男、あつまへゆきけるに、ともたちともにみちよりいひをこせける、

ともたちともにトハ、一通ノ書ニモアマタノ朋友ノ名ヲ載テ、サテ此歌ヲ書テノホセケルニヤ。

忘るなよ程は雲井になりぬとも空行月のめくりあふまて

此歌、『拾遺』雑上ニハ、橘のたゝもとか、人のむすめにしのひて物いひ侍けるころ、とをき所にまかり侍とて、この女のもとにいひつかはしける

忘るなよ程は雲ゐになりぬともそら行月のめくりあふまて

トアリ。爰ニテハ、業平ノ歌トミルヘシ。元来作物語なれは、古歌ナトノヨキ所ニ似相タルヲ引寄テ書ルナルヘシ。程ハ雲ゐトハ、遼遠ノ境ヲ云。下句ノ心、月ノ西流(ル)シテモ又東昇スル、其如クニ馮由也。

十二

むかし、おとこ有けり。人のむすめをぬすみて武蔵野へ(16)てゆくほとに、ぬす人なりけれはくにのかみにからめられにけり。女をはくさむらの中にをきてにけにけり。みち(17)くる人、この野はぬす人あなりとて、火つけんとす。女わひて、

ゐて行トハ、将来(イテユク)、ツレテ行ト云心也。からめられにけりと書、にけにけりと書、詞参差(シンシ)スル歟。此等作物語ノ段ナリ。みちくる(グウヒタカウ)人トハ、満来ト書之。『古注』ニハ道来ト云也。あなりト書テ、あんなりト読。在ト云心也。火つけんとすトハ、藩束ニハ野ニ火ヲツクル事、日本武尊(ヤマトタケノミコト)ノ時モアリシ事也。イマニ敵ヲ犯ス時者、野ニ火ヲツクルト云々。

武蔵野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

此歌、『古今』ニテハ、第一句春日野はトアリテ、春上ニ入タリ。爰ニ五文字ヲ替テ、カヤウニ書ナセリ。作物語ノ由ト可見。歌ノ心ハ、若草のつまトハ、葉サキヲもうるさし

さすかにト云ヲ秀句ニハ不用。かけてトイハン為也。サスカニ今ニ馮心ノアル程ニ、とはぬもつらしト云ハ、きこえねはくるしト云ヲ理リ、とふもうるさしト云ハ、きこゆれははつかしと云ヲ答タル心也。

とあるをみてなむ、たへかたき心ちしける。

此詞ノ心ハ、コトハリケニモト思ヘル心也。

とへはいふとはねはうらむむさしあふみかゝる折にや人はしぬらん

第一ノ句ノ心、トヘハウルサシトイヒ、トハネハツラシト恨ム。人ハしぬらむトハ、身体極リ、又セン方ナキニヨリテ、カヽル折ニハ死モシツヘシト云也。

十四

(此段コリ東平ニイタルト一段タリ)

むかし、おとこ、みちのくにゝすゝろにゆきいたりにけり。そこなる女、京の人はめつらかにやおほえけん、せちにおもへる心なむありける。さて、かの女、

京の人トハ、業平ノ事也。せちにトハ、切ニ也。

なか〳〵(人ノ方様)にこひにしなすはくはこ(19)にそなるへかりけるたま

云。其ヲ妻ニヨセタリ。夫妻是ニ籠ニヨリテ、ナヤキソト云也。爰ニテハ、今ノ女ノ歌也。

とよみけるをきゝて、女をはとりて、ともにゐていにけり。

女ヲ取返シテ帰ルト云也。

十三

昔、武蔵なるおとこ、京なる女のもとに、きこゆれははつかし、きこえねはくるしとかきて、うはかきに、むさしあふみとかきてをこせてのち、をともせすなりにけれは、京より女、

武蔵なる男、業平ノ事也。京なる女、誰トモサヽス。きこゆれははすかしトハ、先段ノ聟カネナトノ事ヲ云。きこえねはくるしトハ、カクアル事ヲ懺悔セネハ隔心メキタルヲ、クルシト云。うはかきにむさしあふみと書ハ、常ノ文ニ其居タル所ノ名ヲ書体歟。あふみトハ、彼国ト京トヲ懸タル心ヲ云。鐙ハ、マタケ(18)タレトモ無離ナル物也。遠国ニヨリテ無音ナルヲ、をともせすト書タル也。

むさしあふみさすかにかけて思ふにはとはぬもつらしとふ

のをはかり
くはこにそトハ、繭事也。カイコノフタコモリヲネカウ心也。玉のをはかりトハ、少シ許ト云心也。繭ハ一年ノ中ニ蠖死スル物ナレトモ、其程ナリトモソヒタキト云心也。『後撰』恋四、忠房朝臣歌ニ、せうそこつかはしける女の返事に、まめやかにしもあらしなといひて侍けれは、

ひきまゆのかくふたこもりせまほしみくはこきたれてなくをみせはや

トアリ。倫独繭(ヒキマユ)ト書也。他説ニハ、籠リノ心を捨テ、只命短キ物ニナリ度ト希也。他説ニ、くはこ(20)ト、コノ字ヲ清也。『万葉』、『古今』恋三、

逢事は玉の緒はかり名の立つはよしのゝ川の滝つせのこと

うたさへそひなひたり(21)ける。さすかにあはれとやおもひけむ、いきてねにけり。夜ふかくいてにけれは、女、歌さへそひなひたりけるトハ、繭ノウハササナトヲイヘルニヨリテ也。ひなひトハ、田舎(イナカ)ヒタルト云心也。さとひたるト云モ、里ナレタル也。ひノ字、馴タル心也。いきてねにけりトハ、業平ノ事也。夜ふかくいてにけれはトハ、明ヌニ帰ル体也。

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる

東間之有家ヲクタトハ家遠也　万葉云かけのたれ尾

きつにトハ、狐也。はめなてトハ、ハマセハヤト云。くたかけトハ、家鶏也。東国ニハ、家をクタト云。またきトハ、早ト云也。せなトハ、背男ト書、夫ト云。やりつるとは、イナセタル也。

といへるに、おとこ、京へなむまかるとて、

無異儀。

くりはらのあれはの松の人ならは都のつとにいさといはましを

栗原ハ、奥州ノ郡ノ名。其所ニ、あれは(ねイ)ト云所アリ。其松名木也。此松ニ諷シテ今ノ女ヲ都ニ具セハヤト云心ナリ。つとトハ、土産(ツト)、産(ツト)、何も書之。ミヤケト云心也。第五句、サソウ心也。

といへりけれは、よろこほひて、思ひけらしとそいひをりける。

よろこほひてトハ、東国ノ詞、只悦也。思ひけらしとそトハ、業平ノ心ヲ察して、我ヲ思給ヘルニヤト云詞也。

十五

昔、みちのくにゝて、なてうことなき(22)人のめにかよひけるに、あやしう、さやうにてあるへき女ともあらすみえけれは、

なてうことなきトハ、何条(ナテウ)ト書。何トコレハヤンコトナキ人ノ妻ト云心也。女ヲ褒タル心也。あやしうトハ、不審(無正事也)ナル心。さやうにてあるへきトハ、業平ニ随ヒハテントハミエヌヲ云也。

忍山しのひてかよふみちもかな人の心のおくもみるへく

此名所、奥州也。しのひてかよふみちもかなトハ、心ノ中ヲ行ミマホシキト云也。おくもト云分、奥州ノ奥ノ字ニ叶ヘルニヤ。

女、かきりなくめてたしとおもへと、さるさかなきえひす心をみてはいかゝはせんは。

めてたしトハ、メテ思フト云詞也。さるさかなきえひす心トハ、此ヨカラヌ田舎心ヲ業平ノミテハイカヽアラント、女ノタメラウ詞也。不祥(サカナキ)ト書、夷心(エビスコヽロ)ト書。いかゝはせんはノはノ字、古キ物ニハ此字を加ヘ用ル事アル也。此段、東下ノ終也。

十六

紀有常従四位下雅楽頭経長衛尉蔵人左近将監馬助兵衛佐左少将少納言周部大輔目承和十二年卒去時正四位下名虎明

むかし、きのありつねといふ(23)人ありけり。みよのみかとにつかうまつりて時にあひけれと、のちは世かはり時うつりにけれは、世のつねの人のこと(24)もあらす。人からは心うつくしう、あてはかなることをこのみて、ことに人にもにす。まつしくへても、猶昔よかりし時の心なから、世のつねのこと(25)もしらす。としころあひなれたるめ、やう〳〵とこはなれて、つゐにあまになりて、あねのさきたちてなりたるところへゆくを、男、まことにむつましき事こそなかりけれ、いまはとゆくを、いとあはれと思けれと、まつしけれはするわさもなかりけり。思ひわひて、ねんころにあひかたらひけるともたちのもとに、かう〳〵いまはとてまかるを、なに事もいさゝかなることもえせてつかはすことゝかきて、おくに、

みよの御門トハ、淳和、仁明、文徳也。時にあひけれとトハ、三代之寵臣ト云心也。世かはりトハ、清和ノ御時